

## 人種差別における白人のディスチャージ

2006年6月、オランダのワークショップにて、ティム・ジャキンスによる話からの引用

人種差別について話します。

人種差別は、いまだに今日、世界において作用している重要な抑圧です。すべての抑圧と同様に、それは人々を搾取することを可能にします。人種差別の場合、それは世界中の人々のほとんどに当てはまります。人種差別によって人々は非常に混乱し、その結果、搾取が西洋諸国内でもその他の世界中の国々でも継続することを許しています。人種差別と搾取は西洋諸国でまさに発生し、そして世界中の多くの場所で、ほとんど抑制されることなく実行されています。人種差別は先進国では人々の目からより隠される場合もありますが、如実に存在しています。

世界の他の場所で行われている闘いに従事するためには、私たちはまず、自分たち自身の闘いに取り組みなければなりません。そして、すべての傷の場合と同様に私たち自身の頭の中から取り組み始めるのです。その傷が自分の内部以外の他の場所で、たとえどんなにひどいものであろうと、もし自分自身の内側にその傷のかけら一つでもあるなら、その自分自身の内側こそ、まず私たちが取り組むべき場所なのです。

私たちは人種差別的な社会で育ちました。私たちはそのことについての選択肢を与えられませんでした。人種差別的な社会で育つ誰もが、何らかの形で人種差別が押し付けられています。人種差別が私たちに押し付けられているからといって、私たちはそれを望んでいるわけではないし、またそれに同意しているわけでもないし、ましてや大いに実行するというわけではありません。私たちの多くは理性では人種差別に反対すると決めています。そして、人種差別を阻止するために激しく抗議し、また懸命に努力し、そして私たちは自分たちと異なる人々と友人になるために自分自身の恐怖心と戦います。これらのことは素晴らしいことです。それらは私たちが傷を信じないことに実際役立つのです。しかしながら、それらのどれも私たちの頭の中にある人種差別の傷を取り除くことはありません。

自分たちと異なるより多くの人と知り合いになればなるほど、彼らに関して私たちが持っている傷は信じられなくなります。しかし傷とパターンは依然として存在しています。単に正しく行動するだけでは十分ではありません。実は、私たちが持っている傷のために、私たち白人は有色人種のことを必ずしも十分によく考えているわけではありません。たとえば私たちが常に一生懸命に妥当なことをしようとしても、私たちの傷によって思考が妨げられ、傷と結びつけて考えている人たちのことをそれほど意識しないということもあるのです。私たちが最善を尽くそうとしている時でさえ、依然として有色人種のことを十分明

確に理解したり、正確に考えることが困難なのです。

私たちの中には、人種差別に基づいた行為を極力とらないように頑張る人もいます。私たちは白人に対して振る舞うのとまさに同じように有色人種に対して振る舞おうとします。これに関して 2 つの問題があります。(1) 私たちは白人に対して完全に人間的に振る舞っているわけではありません。そして (2) 有色人種は白人ではありません。有色人種は白人とは異なった人生を送ってきたのです。それも、人種差別に関する様々な出来事を含む白人とは非常に異なる経験をしばしばしてきたのです。その結果、まるで彼らが白人であるかのように振る舞うことは結局人種差別になるのです。私たちの傷のせいで、私たちは、有色人種を明確に理解できるほど十分には考えていないのです。

私たちがこのことを理解するのは難しいことです。もし私があなたに対してある傷を行動に表したら— 一人の白人として別の白人に対して— それは奇妙なことかもしれませんが、しかしその行動は、私たちが共通して持つ奇妙な社会的枠組みの中に含まれる可能性は十分にあります。もし、私がアジアやアフリカの民族の人に対して同じように振る舞うならば、それは社会的枠組みの外にある可能性がより高くなります。その行動は私たちが共通に持っていることと関係がなさそうです。仮に私が白人に対して振る舞うように彼らに対しても振る舞うとするならば、それは、私の人種差別を抑制しようという試みかもしれませんが、しかし、上手くはいきません。誰もが望むことは、自分をありのままに見てほしいということです。私たちが一人の人や集団に対してとった行動を、よく考えずにそのまま別の人や団体に対して同じ行動をとって、それが上手くいくと考えることが間違いです。

人種差別の抑圧者パターンを持たされたことと戦う人たちは、このようにして躓くことが多いのです。私たちの意向は人種差別のパターンを終わらせることです。しかし、実際それができるほど十分に私たちは考えることができません。最高の善意を持って人種差別を行動に移してしまう場合もあります。それはちょうど多くの子どもたちが最高の善意を持っている親によって傷つけられているのと同様です。善意は思考の代わりはしません。私たちがしなければならないことは、私たちが抑圧者の傷を持っているという事実と直面することです、たとえ、どんなにその考えを憎んでいても。そして状況によって行動的になることが求められている時に、たとえ、傷のせいで消極的であっても、私たちが持っているどんな傷でもその傷は、少なくとも一時的でも私たちに影響を及ぼします。

人種差別のパターンの抑圧者側である私たちはまた、つまり白人である私たちは自分たち自身の利益のために人種差別に取り組む必要があります。人種差別は私たち白人の利益も含めて、すべての人々のために止める必要があります。白人以外の人々が人種差別に

よって公然と傷つけられているので、人種差別を終わらせることが私たち白人にとってどんな違いが生じるのかを理解することは難しいかもしれませんが、しかし、それは結果的には莫大な違いが生じるのです。

一つには、それは私たちが抑圧者の役割から完全に遠ざかることができるということをおぼろげに知ることです。そうすることは世界中の人々の大部分の人たちと接する能力を開花させるでしょう。人種差別はまた私たちと他の白人との関係も駄目にしてしまいます。人種差別は、私たちをお互いに恐がらせ、お互いを分離させる原因の一つです。それによって、私たちが一緒にいることは安全ではなくなるのです。もし誰かが無意識にそして冷酷に誰かに対して振る舞うことがあることを知っているなら、その人が私たちに同じように振る舞わないとは確信が持てません。これは、すべての子どもの心の中で生じるものの一部であるようです。私たちの親たちをあてにするのをやめた理由の一つは、親たちの人種差別的な数々の記録を見てきたからです。

### 抑圧者の役割への取組み

私たちはたいていの場合、抑圧の対象としての役割（たとえば、大人の標的にされた子供としての役割）における傷に取り組んできました。これらの役割では私たちは犠牲者だったので、このような傷に関するセッションをする時、私たちは通常、カウンセラーが私たちの味方になってくれることをあてにできますし、たとえカウンセラーがまだ有能でなくても私たちはセッションを利用できます。

もし私たちが、私たちの中に残されている抑圧者の傷の記憶に取り組む場合、たとえば、他人に対する優越感に取り組まざるを得ない場合があるかもしれません。その場合、カウンセラーが私たちの味方となってくれることを期待できるでしょうか。できないでしょう。なぜなら、一般的に、カウンセラーはこの傷によって再刺激を受けるからです。彼らは無意識のうちに私たちの味方になりません。共に抑圧者という傷に取り組むことができるカウンセラーを見つけることはより難しいのです。それが私たちがこの問題に取り組むことをより難しいものにしてきた理由の一つです。

私たちの多くは、最初に、おびえた無力な目撃者の役割で一つまりある大人が傷に巻き込まれて、理性的でない行動をとっているのを見ている子どものように一人種差別にさらされました。私たちは傷つくと、その痛ましい出来事における役割すべてが記憶の一部となり、そして、後に私たちが実行する役割は、必ずしも傷つけられた役割とは限らないのです。私たちは標的や、おびえた目撃者だったのかもしれませんが、しかし、ある特定の

再刺激を与える状況で、もし私たちが、今、(社会的観点から見て)最も力をもっている人間であるとするならば、抑圧者の役割を実行する場合もあるのです。しかしながら、たとえばその役割を実行する場合でも、私たちは犠牲者の役割を感じる事が多いのです。抑圧的にふるまっている人はあたかも必死になって闘っているかのように感じる事が多いのです。そして、もちろん、傷の只中であっては自分が何をやっているかをほとんど意識していません。後になって初めて、自分がどのように行動したのかについて少しわかるのです。この意識の欠落と自分が犠牲者であるという感情が原因で、たいていの再評価カウンセリングのコミュニティーで、人種差別に対する取組みが遅れてきました。

ミニセッションをしましょう、白人同士で。確かめるべき箇所はたくさんあります。たとえば、自分とは異なる人に対する一番初めの記憶、人種差別が実行されるのを目にした最初の記憶。これが、あなたにとってひどい混乱と失意の領域であっても、カウンセラーをただ見て次のように言えばいいのです。「人種差別をどうすればいいのか私はわからない。」とにかく何度でもそう言って、自分の心に何が生じるのかを観察すればいいのです。

White People Discharging on Racism

プレゼントタイム 2007年1月号 3 - 4 ページより

Tim Jackins

訳：たかこ（田川貴子）

きょうこ（山本教子）

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳 2007年。原文 2006年）。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。